# 戻ってきた〝貴婦人〟たち
# カルチエの来航450年祭

大西洋から五大湖につながる北米大陸の一大輸送路であり、近代カナダ発展の導入口ともいえるセントローレンス川。今夏、この由緒ある川が、世界各地の有名な帆船をはじめ、色とりどりのボートやヨット、単胴船、双胴船などで埋まっている。

フランスの探検家ジャック・カルチエの来航四百五十周年を祝ってのお祭りだ。

まず六月中旬に、カナダはもちろん、ヨーロッパや米国、南米などから、およそ八十五艘の海の貴婦人たち——全装した大型帆船が、ハリファックスに集結し、そこからカルチエの航海のあとをたどってセントローレンス湾に向かい、川をさかのぼって月末にはケベック市の旧港にその優雅な姿を現わした。

帆船が去ると、ケベック市とニューブランズウィック州ガスペ（一五三四年にカルチエが立ち寄ったゆかりの地）の周辺で、国内および国際ヨットレースが繰り広げられ、その次は、トロントからシャーロットタウン（プリンス・エドワード島）までの州対抗千六百キロ・ヨットレース。そして八月十九日には、ケベック市からカルチエの生まれ故郷サンマロまでの、大西洋横断ヨットレースが始まる。モノコック（単胴船）、双胴船、三胴船が参加する〝フォーミュラ・ワン〟レースで、賞金は破格の二十七万五千ドル。

祭りが行なわれるのは、海と川だけではない。ケベック市では、コンサートやフォークダンス、民族フェスティバル、開基三百五十周年を迎えるトロワ・リビエールではスポーツや文化的、宗教的な行事が展開されるし、ガスペ、ハリファックス、フレデリクトン（ノバ・スコシア州首都）、シャーロットタウン、トロントなどでも、同様の記念行事が進行中だ。

ところでカルチエは、「膨大な金およびその他の宝物が見つかるという島々や地域」と、可能ならばアジアへの航路を発見するようにとのフランス国王の命を受け、一五三四年、一五三五—六年、一五四一—二年と、三度にわたってカナダの東部を訪れ、二度目のときはインディアンが〝カナダ〟（村）と呼んだ、現在のケベック市からモントリオールに至る一帯に達した。三度目のときは植民も試みている。

しかしながら、カルチエの抱いていた三つの夢は、ことごとく破れてしまった。アジアへの航路は見つからなかったし、宝石だと思って持ち帰った鉱物は何の価値もなかった。カナダにフランスの植民地を築く計画も、彼の代では実現しなかった。

しかし今日のカナダの発展、特にセントローレンス水路がその発展に果たした役割を見れば、カルチエも大いに満足しているのではないだろうか。